

## 「閉じた住まい」を追って —石垣の分布・形態

関西大学文学部 森 隆男

### 1. 閉じた住まいとは

数年来、私は南西諸島の住まいの調査を続けてきた。敷地の周囲を石垣で囲む外観は、兵庫県の但馬で育った私には異様であった。雨の日が多く日照時間の短い但馬の住まいは、できる限り陽光を取り入れるために開放的に造られるからである。その後各地の住まいを調査する際に、石垣などで「閉じた住まい」に留意してきた。

住まいを開閉する空間として捉える視点は、約30年前に関根康正が提示している<sup>1)</sup>。しかし、その後このような視点に立った研究が展開されることは少なかった。その主たる理由は、開閉の度合いを決定する基準作りの困難さであろう。外観と心意面の両方で、客觀性が求められるからである。

住まいの本質を動物の巣に求める指摘がある<sup>2)</sup>。巣は外敵から身を守り、寝処と繁殖の場である。また構成員以外の侵入を認めない。結果として、巣は閉鎖的な構造をもつことになる。「閉じた住まい」とは、動物の巣がもつ条件と重なる。その外観は、石垣（石垣も石垣と同じ意味で使用されているが、一般的には敷地の造成のために積み上げたものをさすので、これと区別するために本稿では「石垣」の語彙を使用する）や生垣、屋敷林で敷地が囲まれた状態を指すものである。また垣を設けない住まいでは、主屋の開口部が少ない住まいを「閉じた住まい」とみなすことができる。近年の縁側を喪失した都市の住まいは、まさに閉じた住まいというべきであろう。さらに心意的に閉じた住まいは接客の場を住居空間の中で位置づけることで、検証が可能である。玄関付近の応接間で客と簡単な対応をする構造は、家族以外の者を住まいの奥に入れないとという心意的に閉じた住まいとみなすことができるからである。

さて石垣は、しばしば来襲する台風に対する防風の役割を果たすといわれている。石垣の分布をみると、確かに台風の進路に当たる地域に多く首肯できる。風速と石垣の位置や規模について考察した研究成果も提出されている。一方で、屋根が草葺から瓦葺に変わり建築材料が木材や土からコンクリートに変わって

強固な住まいが建築されるようになっても、依然として石垣が残りコンクリートの垣が築かれている。住まいの形態を決定する要素として数値で表現される気候条件だけでなく、地域の歴史などが創りあげた風土も考慮する必要があろう。

本稿では、住まいの開閉の視点から石垣をもつ住まいの分布と形態を取りあげる。あわせて屋敷林により閉じられた住まいにも言及する。その上で閉じた住まいが必ずしも気候条件によって決定されるのではなく、歴史や文化の伝播によって影響を受けた「型」である可能性をさぐりたい。

## 2. 石垣に関する先行研究

漆原和子編『石垣が語る風土と文化—屋敷囲いとしての石垣—』(古今書院, 2008)は、日本列島から済州島、台湾までの地域に分布する石垣を取り上げている。地理学者である漆原は石垣の分布には自然条件が最も強く働いていると述べ、風速や風向、石垣の高さと厚さを数量的に分析している。その上で南西諸島から九州・四国・本州の太平洋沿岸域の石垣が台風による風の強さを、その他の地域が冬の季節風を前提に築かれていると指摘した<sup>3)</sup>。また石垣の築造技術に注目して、曲面をもつ琉球様式と隅に鋭い稜線をもつ本州様式に分類し、それぞれの分布の領域を示した<sup>4)</sup>。ヒンブンの分布域も考慮して、琉球様式が九州西部から対馬まで延び、この地域が本州様式の分布領域と重なる点を指摘したことは重要である<sup>5)</sup>。さらに日本海側の隠岐島で西部は石垣、東部は屋敷林が防風の機能を果たしており、この島に石垣と防風林の境界線を引いている<sup>6)</sup>。

建築学の古川修文は石垣と強風の関係について、集落全体で対応する相互互助型とそれぞれの住まいが対応する独立防御型に分類し、風速を測定したデータをもとに分析をしている<sup>7)</sup>。また古川は、屋敷囲いの分布を示し、風の方向と強さのデータを重ねて解説している。月平均4m/s以上の風速が吹く地域について、南西諸島、鹿児島県と宮崎県の南部、高知県室戸岬、徳島県、愛知県と静岡県の南部から伊豆半島にかけての太平洋側、島根県、石川県能登半島、佐渡島、新潟県、山形県、秋田県の日本海側をあげている。このうち、石垣をもつ住まいは九州地方の南部や四国地方の南部、さらには紀伊半島や伊豆半島、関東地方の太平洋側の一部に分布するとしている<sup>8)</sup>。

古川の成果に私が調査などで得た情報などを加えると、石垣をもつ住まいの分布は九州地方の西部や対馬、隠岐島まで、太平洋沿岸では八丈島まで広がる。いずれにしても黒潮文化圏と呼ばれる太平洋の沿岸が主たる分布域といえよう。

田淵実夫は石垣の技術面から各地の事例を考察し6種類の型を提示したが<sup>9)</sup>、材料に身近に存在する石が使用されているという指摘は、私の調査でも同様であった。

## 3. 石垣をもつ住まいの事例

### (1) 南西諸島の集落と石垣、ヒンブン

八重山・沖縄・奄美のそれぞれの地方に石垣をもつ住まいが分布しており、地域により密度や形態は異なるが、フクギなどの樹木が併用されているところが多い。

八重山地方には現在も石垣をもつ住まいが集落を形成し、美しい景観を創出している。その代表が重要伝統的建造物群に選定されている竹富島であろう(図1)。隣の小浜島では石垣と道路が創り出した景観が「沖縄の道百選」に選ばれている。その多くは浜から運んだ珊瑚石を約1.5mの高さに積み上げている。道路からみて軒が隠れる高さの石垣はほとんどみられない。珊瑚石の垣はハブの棲み処になるため、コンクリートブロックに変容した事例も多い。



図1 竹富島の石垣とヒンブン

鳩間島はかつてのテレビドラマ「瑠璃の島」(日本テレビ)のモデルになつたように、過疎化がすすみ廃屋が目立つ。集落内には敷地の周囲をめぐる石垣、正面開口部のヒンブンだけが残存している(図2)。石垣は高さ約1.5mまで珊瑚石を積み上げただけであるが、強度を保つために下部の厚さが1m程度ある。屋根が低いので、この高さでも十分防風効果が期待できるのであろう。そのため敷地内に入ると比較的開放的な印象が与えられる。このような



図2 石垣が残る鳩間島の集落

石垣の形態は西表島や石垣島でも同様であった。また住まいは島の南側に形成された集落に集中しており、石垣が隣家との境界を示す役割も果たしている。

石垣とヒンブンが創る景観は、沖縄地方も同様である。しかし石垣やヒンブンの多くは、材料がコンクリートブロック製に変わっていている。石垣が濃厚に残存している

のが、伊是名島である（図3）。島の西部に位置する勢理客地区ではそれぞれの住まいが高さ約1.6mの石垣で囲まれている。屋敷林が少なく、開放的な印象を与える。

一方、渡名喜島の集落は石垣が低く、フクギの屋敷林が発達している。フクギの高さは約7mあり、敷地を囲んでいる。また近代になって敷地を1m程度掘り下げて風の影響を減じる工夫がなされている。さらにソンジャキと呼ばれるヒンブンは高さが2m程度あり、「返風」とも表記されるように防風のための重要な設備になっている。このように石垣とフクギ、ヒンブンが閉鎖的な住まいをつくっている。

奄美本島は樹木の垣が目立つ。しかし与路島は海岸に沿って防風のための樹木が植えられ、その内側に集落が形成された。それぞれの住まいには、軒まで届く高さに珊瑚石が積み上げられている（図4）。近年、地域づくりの一環として、石垣の積み直しが行なわれて

いる。奄美地方の事例で注目したいのは喜界島である。この島の東海岸に位置する阿伝の集落は、全戸が軒まで積み上げられた石垣で囲まれ、さらにその内側に樹木が植えられてほとんど建物がみえない。しかしこの島の他の集落では、それぞれの住まいごとに独立した石垣が築かれており、それが家格



図4 軒の高さまでサンゴ石を積みあげた与路島の住まい



図3 屋敷林が少なく開放的な印象を与える伊是名島の集落



図5 要塞のような高い石垣をもつ喜界島の旧西家

を示すシンボルにもなっている。白水地区の勝連家では切り石を2mの高さに積み上げた見事な石垣を見ることができる。また小野津地区の旧西家の跡地には敷地の周囲に3m近くまで積み上げた曲面の石垣が残っており、要塞のような景観を呈している（図5）。

南西諸島の住文化研究の一環として、私はヒンブンを取りあげた

ことがあった<sup>10)</sup>。ヒンブンも石垣の一種であり、かつては南西諸島に広く分布して防風の役割が期待され、あわせて魔よけや目隠しなどの役割を果たしていた。近年、急速に消滅しつつあるが、沖縄地方の離島や八重山地方に比較的濃厚に残存している。とくに石垣島や小浜島では現在も新築の際に新設される「生きた文化」である。

ヒンブンは住空間の開閉に関わる重要な装置といえる。ただし、住まいの外観からみるとヒンブンは閉じる装置であるが、その機能はあいまいであるといわざるを得ない。ヒンブンは八重山地方や沖縄地方では門の近くに設置され、石垣に連続して住まいを閉じる役割を果たしている。それに対し奄美地方では門から奥に10m程度入った場所に設置されることが多く、閉じる役割が期待されているとは思われない<sup>11)</sup>。南西諸島における住まいの開閉の程度は外観上大差ないが、奄美地方では比較的縁が発達している点や<sup>12)</sup>、ヒンブンの有無などを考慮すると、奄美地方の住まいはより解放的といえよう。

## (2) 九州・四国地方

九州・四国地方には樹木と併用された石垣は少なく、石垣単独で設置されている。鹿児島県の坊津には、石垣が軒より高く築かれた住まいがみられる（図6・7）。高さが4mを超すものもあり、ほぼ完全に住まいを閉じている。外光もほとんど入らない構造で、防風を最優先した結果であろう。石垣は曲面を呈しており、喜界島の旧西家とよく似ていて、沖縄地方のグスクの石垣や石垣を想起させる。坊津は近世以前から琉球貿易の港として知られており、物資の流通とともに石工が訪れた可能性も否定できない。



図6 石塀で閉じられた鹿児島県坊津の住まい



図7 石塀の一部に設けられた「石敢當」(坊津)

天草地方にも石塀の住まいが多くみられるが、今まで注目されることが少なく、先行研究も少ない。天草市の魚貫崎地区には、敷地の周囲に高さ2m、厚さ0.5～1mの石塀を築いた住まいがみられる。1階部分がほとんど隠れることになり、防風を目的に設置されたものであろう。残存している石塀の中に隅が曲面になっている事例があり、坊津と同様琉球の様式が認められる（図8）。この地区的石塀には海岸の丸石が多用されている。また巨大な樹冠をもつ亜熱帯の高木榕<sup>あこう</sup>が植えられ、防風と防潮の役割が期待されている。高浜地区の住まいにも、敷地の周囲に高さ約2～2.5m、厚さ0.8mの石塀が築かれている。付近に産する緑片岩を軒まで積み上げたもので、開口部は出入り口だけであり住まい全体が閉鎖的な構造である。北部の倉岳町棚底地区は集落の北に倉岳がそびえ、冬季には「倉岳おろし」と呼ばれる強風が吹く。そこで住まいを守るために、敷地の北側および東側に高さ約2～3mの石塀を築いている（図9）。海岸付近の住まいには北側だけでなく南側にも、高さ約2mの石塀がみられる。残された文書から近世後期には築かれていたことが確認でき、現在140余りの石塀が独特的な景観を創り出している。ちなみに棚底地区の石塀は扇状地を構成する火成岩である。畑を造成する過程で掘り起こされ、処理を兼ねて石塀が作られたと考えられている<sup>13)</sup>。天草地方の石塀の断面は台形で、基礎部分が1～2m、上部が0.5～1mである。

図8 曲面をもつ琉球様式の石塀  
(天草市魚貫崎地区 茶谷まりえ氏撮影)

強風に備えて、経験から編み出された規模であろう。

玄界灘の対馬にも石塀をもつ住まいが存在する。対馬市厳原の武家屋敷には高さ約2mの石塀がみられ、ここでは防火のために築かれたと伝承されている



図9 高い石塀が築かれた倉岳町棚底地区的住まい

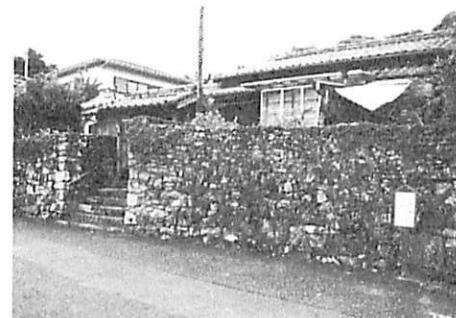


図10 防火と防風のための石塀（対馬市厳原）

図11 海岸に沿って築かれた大規模な石塀  
(愛媛県伊方町正野地区)

（図10）。しかし当地では冬季の季節風が強く、当然防風の役割も果たすことになる。椎根地区や根緒地区にも敷地の周囲に石塀を設けた住まいがみられる。しかし高さが約1.3～1.5mと低く、防風効果はほとんど期待できない。対馬の中部西海岸に位置する木坂地区には、住まいではないが石壁を用いた藻小屋が残存している。藻小屋は畑で肥料として使用する藻を収納する小屋である。韓国の濟州島にみられる石壁の住まいと共に通しており、関連が予想される。

愛媛県佐田岬の先端付近に位置する伊方町正野地区には、海岸に沿って長さ約140mの大規模な石塀が築かれている（図11）。高さは約4mに達し、ところどころに海岸に出るための開口部が設けられている。この石塀には防潮と防風の役割が期待されている。集落の最深部にある旧金沢旅館では敷地の北側と東側に高さ2～3.5m、厚さ0.7mの石塀を設けており、当家出身の喜井ムツ子さん（1941年生まれ）によると、常に強風が吹く当地では日当たりよりも防風を優先していたという。第二次世

界大戦後までほとんどの住まいにみられたが、石工がいなくなつて消滅していったようである。材料の石は浜から運んでいる。この地区では海からの風を防ぐ海岸の石垣に加えて、それぞれの住まいが防風のための石垣を築いていたことになる。正野地区の西に位置する三崎町名取地区は海に面した急斜面を造成して石垣を積み上げた宅地がみられるが、石垣がなく解放的な外観を呈している。この地域には身近な石材を利用する、巧みな石積みの技術が存在していたことがわかる。

高知県宿毛市の沖ノ島には、石垣を築いて狭い宅地を造成し、さらに石垣で囲んだ住まいがみられる。この島では海からの風を防ぐ樹木がほとんどなく、石垣と石垣が防風対策の重要な設備になっている。高知県室戸市の高岡集落は、海岸から100mほど内陸部に形成されているが、石垣に囲まれた住まいがみられる(図12)。この集落では住まいが海岸に沿って一直線に並ぶ形態をとり、古川はそれぞれの住まいが石壁で守られる独立防御型であると指摘している<sup>14)</sup>。山側を除く3方に石垣がみられ、その高さは約3.5mである。道に面した正面は丁寧に加工された石が積まれているが、側面は自然石を積む事例が多い。コンクリート垣に変わった住まいもある。同市の新村地区も石垣で囲まれた住まいが多くみられる。石垣の高さは2~3.5mで、地元で入手された石である。石工がいなくなり、昭和40年ごろからコンクリート製に変わっていったという。



図12 石垣で囲まれた閉鎖的な住まい  
(室戸市高岡地区)

### (3)瀬戸内海の祝島

山口県上関町祝島は、周防灘の東に位置し、古来、瀬戸内海航路の寄港地であった。集落は島の東部に開かれ、幅1m程度の狭い道が複雑に走っている。この島の住まいにはコの字型に石壁が用いられており、厚さは数十cmある(図13)。高い石垣をもつ事例もあるが、その場合は石壁が築かれることはない。海に面した住まいだけでなく、内陸の住まいにもみられ、防風に加えて防火の機能も期待されている。数軒で石垣を共有する事例もみられる。入り口に入る



図13 石壁の住まい(山口県上関町祝島)



図14 石垣と石壁をもつ韓国済州島の住まい  
の石壁を済州島との関連で理解しようとしている(図14)。両者は石が多く産出し、風が強い島という点で共通している。前出の対馬の藻小屋も含めて、今後詳細な検証が望まれる。

### 4.屋敷林の分布

本州の日本海側沿岸から東北地方にかけて、また関東地方に、冬の季節風から住まいを守る屋敷林が発達している地域が点在する<sup>15)</sup>。

まず岩手県奥州市旧胆沢町のエグネを紹介しよう。旧胆沢町は散居村の景観が残る地域として知られている。エグネは敷地の北西側に形成された杉を主体とする屋敷林で、防風と防雪の役割が期待されている(図15)。夏の間に伐採しておいた枝や葉は燃料としても利用された。また植樹後30年から40年経過した杉は、主屋の普請の際に建築材に利用される。さらに夏季には樹林が主屋を包む気温を下げる効果もあるという。敷地の北西側にはキヅマと呼ばれる薪

を積み上げた塀も作られる（図16）。大規模なキヅマはその家の経済力を示すものといわれるが、エグネと同様に防風と防雪の役割をもっている。敷地の周囲にはヒバやドウダンツツジなどの生垣も作られている。このように敷地の北西側に位置するエグネは、住まいの一部を閉じる機能をもっているといえよう。なお主屋にはエグネと密接に関わる構造がみられ、主屋の西側の屋根は寄棟、東側の屋根は入母屋になっていて、北西の季節風が強い当地では、開口部となる入母屋の破風を東側に設けて室内の煙を排煙している。結果として台所は主屋の東側の部分に配されることになる。



図15 屋敷林エグネが形成された散居村の住まい（岩手県奥州市旧胆沢町）

関東地方の平野部の冬は、降雪量は少ないが風が強い。そこで敷地の北側と西側に樺などの高木を中心とした屋敷林を設けている。夏には屋敷内の気温の上昇をおさえる効果も期待できるという<sup>16)</sup>。

砺波平野の散居村に残る屋敷林カイニヨは、重要な文化的景観に選定されている。地元の研究者である佐伯安一は砺波市鹿島の事例をもとに当地方の住まいをモデル化し、カイニヨの役割について詳細な報告をしている（図17）<sup>17)</sup>。こ



な報告をしている(図17)<sup>11)</sup>。こ  
れによるとカイニョは南西の卓越風が強い方向に、杉を中心に櫻などが厚く植えられ、北西の隅には竹藪が発達している。そして主屋の前には柿が必ず2-3本植えられているという。この図では主屋をカイニョと竹藪、納屋が囲む形態になっているが、納屋が建てられるようになったのは昭和に入ってからで、住まいの閉鎖は半分程度であったことがわかる。屋敷林の役割について、冬の季節風から住まいを守るとともに夏の日差しをさえぎる点や、建築材、落ち葉や枝が燃料になることに加えて、富と家格の象徴であったことがあげられている。しかし建築資材の変化やプロパンガスの普及により、屋敷林が減少してい

図16 薪を積み上げた堀キヅマ(旧胆沢町)

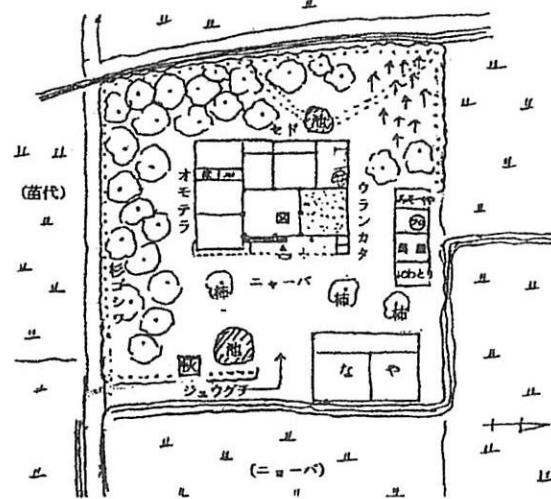


図17 砺波市のカイニヨ  
(佐伯安一『富山民俗の位相』より)

に備えて、敷地の西側に黒松を約2m間隔に一列に植えている。北側にも植える事例がある。2～3年ごとに枝を切るが、棟より少し高い位置の線に木の高さをそろえるため、8～10mになる。このようなノーテゴリと呼ばれる刈込が行なわれたようになったのは、近代に入ってからといわれている。花岡利昌の測定によると、築地松によって風速が3分の1、またはそれ以上減衰するという<sup>18)</sup>。西側から見ると高い松の屏がそびえ立ち、主屋は完全に隠れる。当地では主屋を中心に巽（北西）側に倉、乾（南東）側に屋敷荒神、艮（北東）側に井戸、坤（南西）側に墓地が配される<sup>19)</sup>。築地松の南の隅に墓地が設けられていることになる。

以上のように屋敷林は住まいを季節風から守ることが主たる役割で、多様な機能も付属している。しかし、閉鎖的な状態を創り出しているわけではない点を指摘しておきたい。

## 5. 住まいの開閉と型

住まいを閉鎖する石垣の分布は、南西諸島から九州や本州の太平洋沿岸に沿ってみられ、関東地方がほぼ北限である。また九州西部から対馬、隠岐島にも分布する。これは「黒潮文化圏」とも重なる。一方、同様に住まいを閉鎖す

るという。さて佐伯は屋敷林をもつ住まいの中で、母の胎内にいるような安らぎを感じると述べている。その理由は中から外が見え、外から中が見えないことで、密室状態になっていないからであるという。すなわちカイニョは、あいまいな閉鎖状態を創り出しているといえる。

屋敷林としては出雲  
平野の築地松もよく知  
られている。冬の季節風

る屋敷林が東北地方から日本海沿岸、関東地方の一部にみられる。日本列島において、石垣と屋敷林がそれぞれ分布圏を形成しているといえる。

石垣と屋敷林はともに住まいを風や雨、雪などからまもるために設けられているが、開閉の状態からみると異質である。屋敷林は住まいを柔らかく包み込む、あいまいな閉鎖状態を創り出している。それに対して石垣は比較的完全に住まいを閉鎖する。さらにヒンパンが石垣と連動して住まいを閉鎖していることに注目すると、南西諸島においても地域差があり、奄美地方と比較して沖縄地方・八重山地方はより閉鎖的といえよう。

石垣の分布が気候条件とくに風の強さを反映していることは理解できる。しかし新しい建築材が強固な住まいをつくり出している今も石垣やブロック垣が残存している。これらが閉じた住まいをつくる要素として機能しているとすれば、そこに住まいの型を抽出することが可能であろう。閉じた住まいの型の背景にある文化を考えるとき、漢民族の四合院形式の住まいが参考になる。

四合院形式の住まいは、約2000年前に華北に住む漢民族が過酷な気候と異民族の侵略に対してつくりあげたもので、外部に対しては厚い壁で閉じられる点に特色がある。建物は内庭を囲む位置に配置され、内庭は家族の団欒の場となるほか、接客空間でもあり、儀礼の場にもなる。入り口は東南隅に設けられ、影壁が視界をさえぎる。北方系の四合院形式の住まいは各地に広く伝播し、のちに漢民族の基本的な住まいの様式になった。

華南に居住する漢民族・客家の住まいは、方形や環形の土壁に囲まれた多層の集合住宅の土楼である（図18）。内庭には祖堂が配置され、一族の精神的な核と意識されている。高い強固な外壁と内庭は、土楼が四合院形式の住まいの変形であることを示している。そのほか中国の東北地方には、三方に壁を築いた三合院形式の住まいもみられる。農村部の三合院の住まいは比較的開放的であるが、都市部の三合院の住まいは周囲に壁を廻らした閉鎖的な構造である<sup>20)</sup>。

400年ほど前から台湾に移住を開始した客家の住まいにも、三合院の形式が



図18 漢民族・客家の土楼（高増明氏撮影）



図19 三合院形式を伝える客家の住まい  
(台湾の新竹県)

そのまま伝承されている。私が見学した台北の南西に位置する新竹県の集落には約100年前の住まいが残存し、現在も1家族が生活をしている（図19）。敷地の南側は高さ約2mのレンガ垣で、狭い門をくぐると石疊の内庭が広がる。正面の正庁は2階建で、ロマネスク様式の石柱が2本使用され、外壁のいたるところにアールヌーボー風の装飾が施されている。しかし内部は祖先を祭祀するために仏画を掛けた祭壇が設けられ、壁には中国風の絵が描かれている。内庭の東西は複数家族の生活の場になる廂房である。いずれも外観はレンガの壁で作られている。建築当時に流行していたヨーロッパのデザインを取り入れながら、すまいの基本には漢民族の文化が確実に踏襲されているといえる。

四合院形式の住まいから読み取れる漢民族の住居觀は、防御を最優先する住まいといえる。高く厚い壁は、外敵や過酷な気候から人々を守る象徴である。本来、寒冷の地に誕生した住まいの形式であるが、温暖な地に移住した人びともこの形式を踏襲しているのは、民族の住居觀として定着しているからであろう。

南西諸島や九州・四国・本州の太平洋岸域（ほぼ関東地方が北限）に分布する石垣をもつ住まいは、漢民族の住まいと壁を重視した外観上閉鎖的である点で共通する。しかし心的な閉鎖も含めた「閉じた住まい」としてみなすときは、さらに検討が必要である。この点については、日本と中国、韓国、台湾などの周辺諸民族の住まいを外観だけでなく建物の配置や間取り、客の動線などの点から比較検証する必要があり、今後の課題としたい。

調査に当たっては多くの方から貴重な情報をいただいた。とくに天草市教育委員会の平田豊弘氏、南九州市教育委員会の瀬戸口和宏氏と新地浩一郎氏、そして南さつま市教育委員会の橋口亘氏には、現地の調査で多くのご支援をいただいた。心よりお礼を申し上げたい。

[注]

- 1) 関根康正「住まい方の比較文化論」『日本の住まいの源流』文化出版局, 1984, 214 頁。
- 2) 上田篤「カクレガからミアラカへ」(上田篤他『空間の原型』筑摩書房, 1983) 10 頁。
- 3) 漆原和子編『石垣が語る風土と文化—屋敷囲いとしての石垣—』古今書院, 2008,  
225 頁。
- 4) 前掲 3) 223 頁。
- 5) 下野敏見は年中行事や生業にもなう民具の分布を通して、琉球文化圏と大和文化  
圏の境界が屋久島の南にあると指摘している (下野敏見『南西諸島の民俗』法政大  
学出版局, 1980, 547 頁)。
- 6) 前掲 3) 218 頁。
- 7) 古川修文・宮武直樹・山田水城「愛媛県外泊の民家における石垣の形態と防風効果  
に関する研究」民俗建築 115, 1999。
- 8) 日本民俗建築学会編『図説 民俗建築大事典』「防風の知恵」の項, 柏書房, 2001。
- 9) 田淵実夫『石垣』法政大学出版局, 1975, 86 頁。
- 10) 森隆男「住まいの変容と伝統儀礼—沖縄小浜島のヒンブンを中心に—」関西大学東  
西学術研究所紀要 44, 2011。
- 11) 森隆男「設置位置からみたヒンブンの機能」民俗建築 140, 2011。
- 12) 森隆男『住居空間の祭祀と儀礼』岩田書院, 1996, 153 頁。
- 13) 『防風石垣を巡らす棚底の集落景観』天草市教育委員会, 2011。
- 14) 前掲 7)
- 15) 額田巖『垣根』法政大学出版局, 1975, 162 頁。
- 16) 市川健夫「日本列島の風土と民家」民俗建築 100, 日本民俗建築学会, 1991, 9 頁。
- 17) 佐伯安一『富山民俗の位相』桂書房, 2002, 98 ~ 110 頁。
- 18) 花岡利昌『伝統民家の生態学』海青社, 1991, 118 ~ 126 頁。
- 19) 石塚尊俊『日本の民俗・島根』第一法規, 1973, 27 ~ 29 頁。
- 20) 茂木計一郎ほか『中国民居の空間を探る』建築資料研究社, 1991, 10 ~ 29 頁。